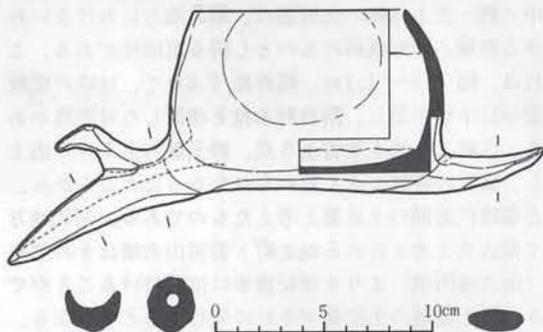


9. 長浜市国友遺跡出土の 異形土器

国友遺跡は、長浜市国友町と今町にかけて所在する。従来より古式土師器等の出土することが知られており、1974年から1975年にかけて、北陸自動車道関連遺跡として発掘調査が実施された。

調査の結果、土壇墓1基と姉川の旧河道と思われる大溝が検出された。大溝からは、古墳時代全期を通じた須恵器、土師器、木器等が多量に出土したが、その中に、鳥形様の異形注口形土器があった。類例については寡聞にして知らないで、ここに紹介して御教示を仰ぎたい。

この異形土器の大きさは、全長24.9cm、高さ11.8cmで、胴容器部分の高さは8.5cm、最大径11.8cmを計る。頭部は上下に分れ、上方は鉤状に上方に突出し、下方は断面U字状を呈して前下方にのびる。頸部は、短かく断面楕円形で中央に小穴が穿たれ、胴部の下方に付く。胴部は、上方に大きく開口し、楕円形の容器状と



なっている。尾部は、断面扁平な楕円形を呈し、尻上りに終る。

胎土は、わずかに砂粒を含むものの精緻で、色調は黄褐色を呈し、硬質である。成形手法は、手づくねの後、内外面ともに細かいへら削りを施している。

これは、一種の注口形土器であるが、この異形土器を出土した大溝からは、古墳時代全般の遺物が出土しており、相伴関係からその年代をとらえることは困難である。ただ、成形、胎土、焼成よりして、古墳時代後期には下らないものと考えられる。(林 純)

10. 湖北地方において 最近発見された遺跡

1

湖北地方は、余呉川、高時川、姉川、天ノ川等の河川によって形成された広大な沖積平野が広がり、肥沃な穀倉地帯を形成している。しかし、ここ数年の間に、国道8号線長浜バイパス、北陸自動車道、国道365号線バイパス等の幹線道路工事が計画され、また施工されてきた。さらに、穀倉地帯であるがため、大規模な場整備事業が実施されるようになって、その独特な景観が一変しつつあるとともに、遺跡の保存と開発との調和という問題が顕著になってきた。

こうした開発の波が押し寄せてきている反面、幸か不幸か、開発の事前調査によって意外な考古学的事実が得られ、また、工事中に新しく遺跡が発見されることも少なくないのである。そしてまた、こうして得られた知見が、比較的考古学的成果の少なかった湖北地方において、その古代史解明に多大に貢献しているこ

とも否めないのである。ここに、こうして得られた資料をまとめて紹介しておきたい。

2

1973年から1974年にかけて、北陸自動車道関連遺跡として調査された長浜市大東遺跡は、従来、瓦が出土することから寺院跡として周知されていたが、発掘調査の結果、第2次坂田郡衙跡と推定される掘立柱建物群のほかに、湖北地方で最初の弥生時代後期の方形周溝墓が検出された。これは、弥生時代後期後半の甕形土器と壺形土器を出土したものと、弥生時代後期前半の甕形土器・壺形土器・器台形土器を出土したものと2基で、まさに意外な発見であった。(注1)

同様例としては、1974年の同じ北陸自動車道関連遺跡である湖北町野・岩原古墳群の調査で、古墳の形跡は認め得なかったが、弥生時代後期を中心に古墳時代前期に及ぶ方形周溝墓1基と土壇墓34基を検出したのである(丁野遺跡)。方形周溝墓に関して見れば、ほぼ同時期の長浜大東遺跡が平地に単独であるのに対し、当遺跡の場合は平地の独立丘陵上に位置し、34基以上の土壇墓を伴うものであり、弥生時代から古墳時代へ

移行する過程において、その被葬者の属する農業共同体の発展段階に、少なくとも二相を見ることができたのである。(注2)

大東遺跡、丁野遺跡の意外な発見によって、弥生時代終末の墓制研究上に有効な資料を提供したが、湖北地方ではこれに続く発生期古墳の存在は知られていない。ただ、上記2遺跡と同様の契機で発見した余呉町中ノ郷・笠上遺跡の土坑墓は、湖北地方におけるいわゆる高塚古墳形成前のもとし得る可能性がある。これは、幅0.9～1.1m、現存長7.6mで、坑底の横断面がU字形を呈し、割竹形木棺を埋置した可能性がある。坑底より碧玉製管玉5点、碧玉製勾玉1点が出土し、盛土の痕跡が全く認められなかったところから、古墳時代前期の土坑墓と考えたものである。湖北地方で最古式と考えられる湖北町・若宮山古墳はその墳形(前方後円墳)より4世紀後半に位置付けることができ、笠上遺跡の土坑墓がそれに先行するとするなら、丁野、大東両遺跡に続く一形態として注意されよう。

(注3)

3

1973年、北陸自動車道関連遺跡として、長浜市小一条町・諸頭山古墳群の調査を実施した。ここでは3基の横穴式石室を有する円墳が確認されていたが、同年の調査により、竪穴式小石室を有するもの(3号墳)を検出した。長さ1.1m、幅37～46cm、現存高70cmで、割石と自然石を併用し、横穴式石室と同様の積み方を示すものであった。副葬品は皆無で、直接年代を決定し得なかったが、同時に調査を実施した2号墳がその副葬品より7世紀初頭に位置付けられ、3号墳をこれに続く終末期古墳と位置付けた。(注4)

1977年になって、余呉町中ノ郷・式内鉛練比古神社の裏山で、北陸自動車道に関連する墓地移転工事の際、多量の須恵器の出土したことが伝えられた。現地調査の結果、直葬墓らしい古墳であることが知られた(鉛練古墳)。採取された須恵器は同町坂口・上ノ山第7号墳出土のものに近似し、湖北町郡上・四郷崎古墳出土のものに先行するようである。上ノ山7号墳はすでに消滅しているが、遺物出土の際の状況を聞く限りでは石材はなかったとのことであり、直葬墳ではないかと推定したものである。また、四郷崎古墳は長方形玄室の長辺に羨道が取り付く古式の横穴式石室を有するものである。このことにより、鉛練古墳の発見によって、四郷崎古墳の横穴式石室が湖北地方における最古式の形態をとるものであることの裏付けを補強するとともに、後期古墳群形成初期の主体部構造を明らかにした。

諸頭山3号墳と鉛練古墳の発見は、湖北地方における後期古墳群形成の初期と終末期の様相を明らかにした。すなわち、既調査例を加えて鉛練古墳・上ノ山7

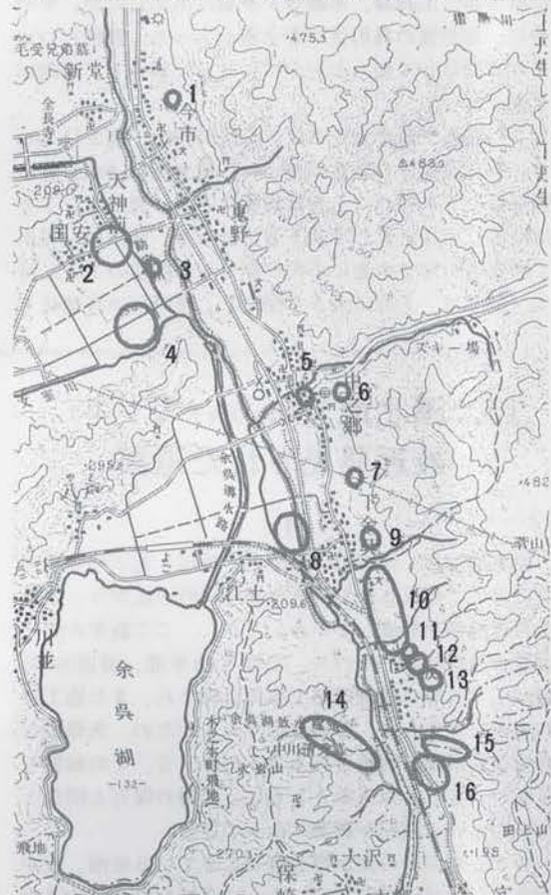
号墳→四郷崎古墳→米原町磯2号墳→上ノ山1号墳→諸頭山2号墳→諸頭山3号墳の編年序列が考えられ、直葬から横穴式石室の導入、さらに、玄室平面形の変化を通じ、単葬、無副葬品化という終末期に至る過程を明らかにしたのである。

さらに、こうした編年序列に加え、1975年に、北陸自動車道関連の土取り現場で、四郷崎古墳と磯2号墳との間を埋める古墳の発見があった。長浜市小一条町中山の南北に長い小独立丘陵尾根に立地するもので、玄室南壁の最下段のみを残すだけであったが、幸い、須恵器48点、ガラス小玉114点、ガラス丸玉4点、金環2点、鉄環1点、石製紡錘車1点を採取し得た。

(注5)

4

1975年、北陸自動車道建設工事と直接関連はなくなったが、土取り場予定地の遺跡確認調査によって、円墳8基からなる古墳群を発見した(西山古墳群)。余呉町坂口に所在し、集落南端にある式内意波閉神社の、



遺跡位置図

1. 狐塚古墳、2. 松田遺跡(奈)、3. 横塚古墳、4. ナラ寺遺跡、5. 日槍塚古墳、6. 鉛練古墳、7. 崩れ谷古墳、8. 蔵方遺跡(奈、平)、9. 北畑古墳、10. 坂口遺跡、11. 大門古墳、12. 坂口遺跡、13. 上ノ山古墳群、14. 西山古墳群、15. 永山古墳群、16. 桜内遺跡(弥)

余呉川をはさんだ西側の低丘陵尾根上に立地している。

また、詳細は明らかでないが、近似した立地や古墳の配列を示すものとして、意波閉神社後背の丘陵尾根上に9基の円墳が立地する黒田・永山古墳群がある。この古墳群は今夏より北陸自動車道関連遺跡として発掘調査を開始しているが、今までに調査を実施したものは、外部施設に葺石を持ち、墳頂部に木棺直葬墓が2基検出された。第1号主体からは短甲1点、直刀2点、短刀1点、鉄鏃一括、須恵器壺1点、土師器甕1点、第2号主体部からは短甲1点、鉄剣4点、短剣1点、鉄鎗2点、鉄鏃一括が出土した。第1号主体部より出土した須恵器壺は、上ノ山7号墳や鉛練古墳より先行するものであり、葺石の存在、武器・武具など鉄製品のみを副葬している等、古墳時代中期の色彩が濃く、その末期に位置付けられるものとする。

湖北地方における古墳時代中期古墳としては、高月町の古保利古墳群、涌出山古墳群、物部古墳群、湖北町の丁野古墳群、岩原古墳群、飯喰山古墳群等がその北部域のものとしてあげられるが詳細は明らかでない。ただ、これらは、いずれも前方後円墳を中心に円墳が付随するという形態を取っており、前方後円墳の形態からして永山古墳群に先行するものと考えられる。現在までに調査されたものとしては、浅井町上ノ前・雲雀山古墳群（円墳4基）があり、その2号墳は、出土土器より永山古墳群にはほぼ並行すると考えられるが、内部は「所謂、竪穴式石室の側壁の特殊機能を簡略した最小限の構造」(注6)のものである点異なる。ともかく、永山古墳群の調査によって、湖北地方における古墳時代中期末、あるいは、後期古墳群発生に至る過程が序々に明らかになりつつあるというのが現状である。

5

北陸自動車道の場合、平地における本線部分の大半は土盛工法によって施工されるので、いきおい、遺跡の発見は丘陵の掘削部分に限られてくる。これに対し、ほ場整備事業の場合は、特に湖北地方のように、条里施行後ほとんど固定した田地が遺存している場合、踏査によってはほとんど発見し得ない平地に立地する遺跡が、排水路の新設等によって現われてくる場合が多い。たとえば、1973年、湖北町今西の畑地において、古墳時代を中心とする遺物の出土を見た。四周の田面より1m前後高位をなす畑地を遺跡範囲と考え、発掘調査が実施されたが、布留式並行期と思われる甕や器台を出土したかまど痕を囲む溝状遺構、S字状口縁を持つ甕形土器を出土する溝跡等を検出し、いわゆる古式土師器に関して貴重な資料を提供した。(注7)

1974年には、びわ町稲葉と湖北町大安寺との境界付近で、排水路掘削の際、弥生時代前期と思われる甕形土器を含む遺物の出土を見た。(注8)

また、同年、びわ町難波から新居にかけて、やはり

排水路掘削により多量の遺物が出土した(難波遺跡)。ここでは、湖北地方で最古式の須恵器高杯、県下で新旭町に次いで二例目の発見である土馬のほか、奈良時代から平安時代および布留式並行期と考えられる土器が出土している。(注9)

1974年には、さらに、高月町西阿閉で遺物の発見があった。翌年、発見地の北方ではほ場整備事業の計画があり、事前に発掘調査を実施したが、宇戸棚付近で、庄内並行期と考えられる一括資料を包含する溝状遺構を検出している。(注10)

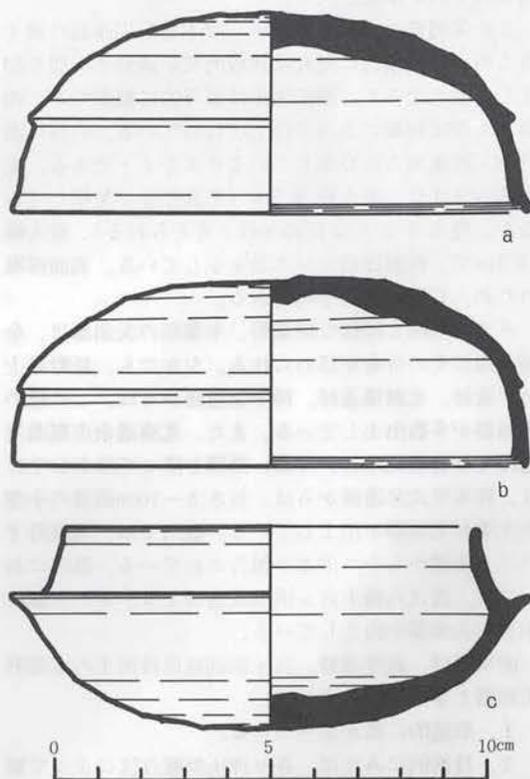
その他、1974年から1975年にかけて調査され、奈良時代を中心とする131棟以上の竪穴式住居跡を検出した高月町保延寺・大海道遺跡、1976年から1977年にかけて、現在も調査を継続中である高月町井口遺跡等も、ほ場整備事業に先立つ遺跡確認調査で新たに発見したものであった。

このように、ほ場整備事業に関しては、平地に埋没する遺跡の発見が多く、しかも、条里施行以降ほとんど田地が固定しているためか、遺跡の保存状況が非常に良好であり、大海道遺跡のように、一集落跡が完存している場合が多いことは注目すべきである。

(田中 勝弘)

6

最後に、前述の鉛練古墳からの採取遺物を紹介して



余呉町鉛練古墳出土須恵器

おく。

杯蓋のaとbは、口縁部径12cm、器高4.4～4.7cmで、天井部にやや丸味がある。天井部と口縁部は、わずかに突出する稜線をもって区別し、口縁部はやや丸味を持って開く。端部は内傾し、凹む。天井部外面は、約3分の2ほどへら削りして調整している。胎土に小石や砂粒を含み、焼成は堅牢で、灰黄色の色調を呈している。

cの杯身は、内湾して内傾する口縁部と、斜上方に短かく突出する受部を持つ。端部はともに丸味を持つ。底部は丸く、3分の2ほどへら削り調整している。

これらは、すでに述べたように、湖北地方では四郷崎古墳出土のものに先行し、上ノ山7号墳のものに並行するものである。(林 純)

注1. 別所健二・田中勝弘・谷口義介「大東遺跡」

(『北陸自動車道関連遺跡調査報告書Ⅲ』1976年)

注2. 別所健二・田中勝弘「丁野遺跡」(『同上Ⅱ』1976年)

注3. 田中勝弘「笠上遺跡」(『同上Ⅰ』1974年)

注4. 田中勝弘「諸頭山古墳群」(『同上Ⅰ』1974年)

注5. 鬼柳彰「中山古墳」(『同上Ⅲ』1976年)

注6. 直木孝次郎・藤原光輝『滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳調査報告』(大阪市立大学文学部歴史学教室紀要第1冊。1953年)

注7. 中谷雅治『滋賀県湖北町今西遺跡発掘調査報告書』1974年

注8. 田中勝弘「湖北町大安寺遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』1976年)

注9. 田中勝弘「びわ町難波遺跡」(『同上』1976年)

注10. 田中勝弘「高月町円通寺遺跡」(『同上』1976年)

11. 大津市真野小学校保管の木葉形尖頭器

大津市真野町に所在する真野小学校に、一本の尖頭器が保管されている。この石器は以前(戦後)、小学生により採取されたものである。現在、明確な出土地点は不明であるが、おそらく真野近郊の丘陵部より出土したものと推定される。

この尖頭器は、形態分類すれば木葉形尖頭器に属するもので、技術的に見れば比較的荒い調整で両面を加工したものである。細部加工は部分的に観察でき、両面とも押圧剥離によって仕上げられている。石質は瀬戸内・近畿地方に分布しているサヌカイトである。尖頭器の寸法は、現在長9.2cm(先端部分が欠損しているが、復原すると全長10cm程と考えられる)、最大幅3.7cmで、断面は凸レンズ状をなしている。表面採取のため、石器組成は不明である。

さて、本例と同様な柳葉形、木葉形の尖頭器は、全国各地にその分布が認められる。なかでも、長野県上ノ平遺跡、北踏場遺跡、神子柴遺跡からは、この種の尖頭器が多数出土している。また、北海道余市郡曲川遺跡では有舌尖頭器、刃器、搔器を伴って出土しており、群馬県武井遺跡からは、長さ3～10cm前後の小型の木葉形尖頭器が出土している。畿内では、大阪府下の二上山麓からその出土が報告されている。県内においては、近江八幡市宮ヶ浜湖底遺跡よりチャート製の木葉形尖頭器が出土している。

曲川遺跡、武井遺跡、宮ヶ浜湖底遺跡出土の木葉形尖頭器と本例を比較すれば、

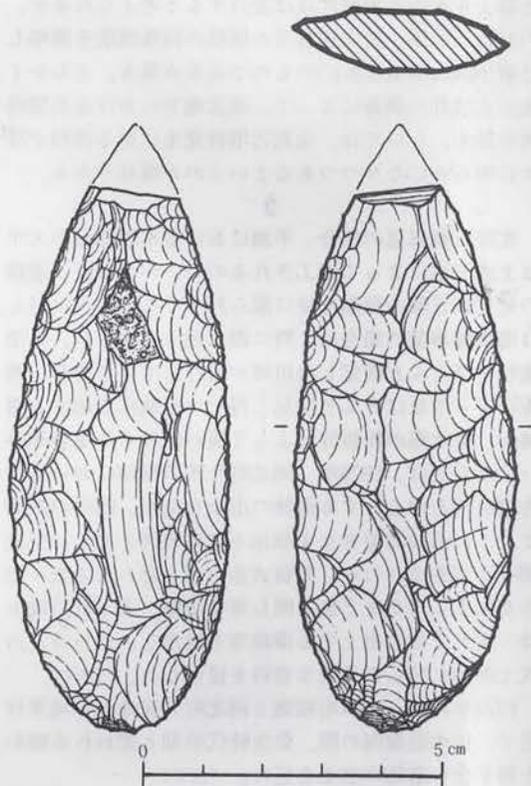
1. 形態的に似かよっている。
2. 技術的にみれば、各々押圧剥離技法によって製作されている。

3. 断面形は凸レンズ状を呈する。

といった類似点がある。しかし石質は、曲川遺跡例では黒曜石、宮ヶ浜湖底遺跡例ではチャート、本例がサヌカイトというように異質である。

こうした点から考えて、真野小学校に保管されている尖頭器は、出土状況は不明であるが、旧石器時代の「尖頭器文化」の段階に位置づけることができよう。

(勢田 廣行)



木葉形尖頭器(真野小学校保管)